

2月18日 ヨハネによる福音書10章7～18節

説教題：「大事なものを捨てる覚悟」

本日から受難節が始まりました。十字架の下の典礼布もこの時期を表す紫色に変わっています。紫色は高貴な色であり、同時に悔い改めを意味する色でもあります。さて、皆様は何か悔い改めることはあるのでしょうか。例えば何かを習慣にしている、やめようと思ってもやめられない、それを捨てることができないというものはあるのでしょうか。

何かをやめられないという方にお勧めなのが、受難節の時期に行われる「克己献金」というものです。これは、好きなものや習慣になっている事を受難節の間に我慢をして、その分のお金をイースターの時に献金することで、「様々な欲望や自己中心的な生き方を克服し、己に克つことの表れと感謝」として行う献金です。イースターが終わったら解禁で、また食べたり飲んだりし始めるのですが、「喜びの時が待っている」と思いながら忍耐の時を過ごす受難節の日々によって、そしてイエス様の十字架への苦しみのほんの一部でも味わうという体験によって、私たちは信仰を深めることができるのだと思います。

今日の個所で示されているイエス様の十字架への覚悟は、自ら命を捨てるという能動的な愛の業であり、「互いに愛し合いなさい」という掟を体現した業であります。この「愛」はアガペー、無償の愛を意味します。相手からのお返しを期待することなく、自分から他者へと送られる一方通行的な愛です。この一方的な愛を、互いが互いに向けることによって、私たちはイエス様が実現した完全な愛の共同体としての教会をこの世界に実現することができるようになるのです。

愛するという行動、特に無償の愛とは、自分が損をする点において真の愛を示すことになります。愛するという行動によって自分が得をするのであれば、それは「自分のための愛」へとつながります。そうではなく、愛することによって、時間をかけて、お金をかけて、心をかけて、それでも何も得られることがないかもしれない。かけた時間を、お金を、手間を捨てることになるのかもしれない、少なくとも自分には見返りが無いのかもしれない。それでも「愛した」という事実で満足をすることができる、それこそが「無償の愛」なのです。

今日の個所で語られている言葉のとおり、イエス様は人間として最も大切なものである命を捨てても、私たち一人一人が信仰に入り、救われるようにと十字架にかかりました。私たちはその受難と愛の業を思い、この6週間を過ごし、イースターにおける復活の喜びへと進んでいくことになります。だからこそ、私たちもその苦しみの一部にあずかるためにも、普段無意識に行っていた習慣の一つ、捨てるのはどうでしょうか。

ローマの信徒へ書いた手紙の中で、パウロも次のように言っています。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」、私たちもまた、希望を手にするために、少しばかりでもイエス様の苦難を共に味わうことができるのです。私たちはその「大切なものを捨てる覚悟」を、御言葉からもらっています。命を捨てたイエス様は、復活の命を得ました。私たちもまた、何かを捨てたその先には神様からの新たな愛と恵みが与えられるのです。私たちが互いを愛するために、自分のことを思うのではなく、その力を他の誰かに向けることをイエス様は望んでいます。そのための克己、己に打ち勝つ業をこの一週間から始めて行きましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 10 章 7～18 節

- 7:イエスはまた言われた。「はっきり言うておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いだ。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いだ。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」